

母方の祖母が亡くなったのは、八月の暑さも成りを潜め始めたころのことだった。不真面目な学生である私は、学業に励むこともなくただぐうたらと夏季休業を過ごし、祖母の訃報を耳にするほんの数十分前など、のんきに昼寝をしていたものだ。睡眠のとりすぎで覚醒が不十分な頭は、すぐに祖母の死を受け入れることができるほど都合よくできておらず、私はひどく取り乱してしまった。

ぐるぐるとまとまらない思考を巡らせながら、リビングのテーブルにつく。横で流れるバラエティ番組の笑い声がいやに耳に障る。携帯電話を耳に当てた母が、少しばかり顔を歪ませながらテレビを消す。

母の声だけがする静かなリビングは、私の頭をクリアーにさせるのにそう時間をかけさせるはずはなかった。

――先の夢があつた過去の思い出させなければ。

塗りつぶされていたはずの不思議な過去を辿るため、私は過去の夢の幼い自分をもう一度追いかけて始めることにした。

私にとって、なにも身近な人が亡くなるのはこれが初めての経験というわけではない。それを経験したのは小学四年生の夏、ちょうど六年前の祖父の死が初めてのそれだった。

祖父母の家は自宅から車で一時間ほどで着く。そこからまた一時間ほどかけて車を走らせると、葬儀場に着く。

「俺が死んだ後は運ぶのが楽でいいなあ」

生前の祖父が冗談なのかわからないトーンでそんなことをいって、幼い私を困らせたのは八月のお盆のことだった。

それからまもなくして祖父はポックリといってしまった。

あまりに突然なこと、私は悲しむでもなくただきよんとしていた。祖父の死を受け入れられないのではなく、ただそれがどういうものなのかわかっていなかったのだ。

数日後には通夜があった。その頃からぐうたらだった私は朝早くに起こされてすこし不満気だ

ったが、父と母の思い詰めた顔を見ると、そんな心情は引つ込んだしまった。両親の重い雰囲気につられるかのように、私の心も静かに沈んでいく感じがするのがわかった。

喪服で黒く包まれた私にとって、買ったばかりのピカピカのオデッセイはなんとも眩しく、すこし憎らしくさえ感じたものだ。私が車に乗りこんでシートベルトをしめると、父が車を走らせ始める。母はその横で顔を俯かせていた。

私はオデッセイの後部座席から空を眺めていた。どこまでも広がる明るい青が、向かう先で優しく待っていた気がしたのを覚えている。

祖父母の家へは、小さな川に沿うように造られた道路をつかって向かう。少し前に祖父にあつたときもそうだった。川の流れに連れ立ってしばらく進むと、だいぶ前に造られたであろう古めかしい橋が見えてくる。そこを渡れば祖父母の家はすぐそこにある。

「……はやかったねえ」

一番にここに来たのは私達のようだった。他の親族は遅れて着くらしい。家にいたのは祖母と伯父だけだった。挨拶もなく家に迎え入れられた、クーラーのあまり効いていない居間は、重い雰囲気も相まって居心地が悪かった。いつもなら祖父が祖母に続いて明るい調子で言葉を紡ぐのだが、もうそれもない。伯父は顔をしかめたままタバコをふかせているし、祖母も最初の一言をいってからはそれきりで、椅子に座ってじっとしたままでいた。

長く続く暗い沈黙に、このままここにいたたまれなかった私は、大人たちに一言の断りもいれずに衝動的に外へと出てしまった。

あの場から逃れたのはいいものの、季節はまだ夏である。川沿いを歩きはじめた私は、今度は暑さに嫌気が差してきた。だから、私がああ古めかしい橋の下の影に向かうのは必然的であったし、あの男との出会いも、不思議な経験をすることができたのも、ただの偶然ではなかったはずだ。なにかしらの導きでもあったのだろうと、今でも思う。

橋の下で、誰かが黙々となにかしらの作業をしているのが目に付いた。

(今いってしまうと邪魔になってしまうだろうか)

こちらがどうしようか考え込んで立ち止まると、向こうはこちらの存在に気づいたようで、作業の手を止めて顔をこちらに向けていた。また少しの日陰もない道を歩くのは嫌だったので、私は利己的な勇気を振り絞って声をかけたのだった。

「……こんにちは」

「あ、ああ……どうも……」

橋の下の影におずおずとはいる。そこにいたのは、明るい空色の作業服を着た大柄な男だった。男はすぐ隣にきた私に少しばかりの動揺をみせつつも、すでに作業を再開していた。

しばらくの間、私はその男の作業をじっと見ていた。なんのためにやっているのか皆目見当もつかないものだったので、とても興味をひかれたのだ。

大きな黒いポリ袋から大小様々な大きさの黒い塊を取り出すと、不自然なぐらい青いペンキで黒い塊を丁寧塗っていく。青い塊に塗り変わったものを男はそっと下に置くと、また黒い塊を取り出して、青くするその作業を繰り返す……。

私としてはその作業を見続けるのは中々面白く、大した苦にもならなかったのだが、作業するこの男の方はそうでもないらしい。この橋の下が大分涼しいのにも関わらず。男の頬を汗がうーっと撫でるように伝っていった。なんだか苦しそうな顔でずっとその作業を続けるので、私は不思議に思った。

「おじさん、その作業そんなにツライんですか……?」

ピタッ、と男はペンキを塗る手を止めた。こちらを向くこともなく、青いペンキで塗り潰されたその塊に視線を落としたまま、私の質問に答えた。

「……ああ、ツライさ……とても心が苦しくなるんだよ……」

私は予想外な言葉に少し驚いたし、また不思議にも思った。

「……心が苦しくなる?」

私が続けて疑問を投げ掛けるよりも早く、男は口を開いた。

「おじさんのやってることは……とってま大事なことのはず……なんだ。でも、それは悲しいことでもあって……そうだなあ……」

彼は言葉を必死に探しているようで、しどろもどろになりながら答える。

困った様子の彼が視線をこちらに向けて、私の服をちらっと見た。

「もしかしなくても……お葬式かい?」

「はい」

「そうか。……そうかあ……」

彼はもういちど私の方を見る。じつーと……。彼の顔の眉間に、皺ができていた。

「……お葬式が終わったら、またここに来てくれるかい？……そのほうが説明しやすい、それに……」

彼は目線を空に向ける。日も天頂を過ぎ、すこしずつ傾きはじめるころだった。

「そろそろ戻ったほうがいい。もしかしたら君のことを心配してるかもしれないし……」

私ははっとした。断りもいれずに飛びだしてきたことなどすっかり忘れていたのだ。

「おじさん、ボクもういくね」

「ああ」

別れの挨拶もそこそこに、橋の下から駆け出した。空の澄んだブルーの鮮やかさは、まだ変わっていなかった。

葬儀が全て終わったのは、翌日の深夜だった。喪主であった祖母と伯父は、祖父の死があまりに突然なものだったので、葬儀はスムーズには進ませられなかった。もう遅いので、その日私達は祖父母の家に泊まった。帰るのは明日の昼過ぎということだった。親戚の間でつもる話でもあったのかどうかはその頃の私にはわからなかったが、それは私にとって都合がよかった。

「……」

「……やあ。……こんにちは」

空色の作業服の彼は、言葉に詰まった。それもそうだろう。彼の目に映る私はあまりにも痛々しく映ったはずだ。祖父の亡骸に対面し、その身体の冷たさに触れた私はわけもわからず、否応なしに祖父の死を受け入れさせられたのだ。それから、私の気持ちは黒く大きく沈むばかりだった。

橋と青空の下で私はビービーと泣きじやくった。それを何者も遮ることはなかった。私の泣く声だけが、頭の中でグルグル巡りながら響きまわっていた。

「……」

涙を拭って、声にならない嗚咽をだすばかりの私。彼の作業服の空色が視界にはつきりと映るまで、随分と長い時間がかかってしまった。その頃には彼はもう目線を私に合わせるように屈んでいた。

「……誰かのために泣けるのはいいことだ」

彼ははにかみながらそういった。しかし、私は彼のつくった表情の奥に陰りがあるのを見逃さなかった。

「でも……泣くのはやっぱり辛いよね。泣いているのを見るのだって辛いさ……」

彼は目を伏せた。……いくばくかの静寂があった。

彼は足元の黒いポリ袋からおもむろにあの塊を取り出した。ひときわ大きく、ほかのものよりも濃い黒をしていた。

「これは君のものさ」

そういつて彼はまた心苦しそうな表情をしながら、青いペンキで黒い塊を塗りだしはじめた。ちらりと顔をのぞけば、今度は目に涙を浮かべていた。

「悲しいんだ……。辛いんだよ……。君もいずれ泣かなくなるし、そんな思いもせずになむようになる……。なってしまうんだよ……」

彼の額に汗が浮かぶ。涙が頬を伝って塗られた青に落ちていったが、それでペンキが滲むようなことはなかった。

大の男が泣くのを見て私は眉をひそめるでもなく、それをじっとみていた。彼のその姿よりも、先日の葬式で目をふせていただけの大人たちがよっぽど情けなく感じた。幼い時分の私でも、彼の言葉の意味がわかったような気がして、そのときの私は悲しくもあり、また寂しいとも感じた。

私の黒い塊が青く塗り終わった。と同時に、胸を風がすくような感じがして、私の中の何かが変わり始める気がした。

彼はそれを優しく床に置くと、今度は青いポリ袋の口を開けた。そこからはペンキの乾ききったいくつもの濃い青の塊が顔を覗かせていた。この前には無かったはずだ。彼はその塊をひとつひとつ優しく取り出した。私は何をするのか聞こうとしたが、やめた。彼のあまりにも苦しそうな表情は、私に声をかけるのをためらわせたのだ。

……彼は、青い塊を川の中へと転がすように投げ入れた。

その行為に、私は特別驚きはしなかった。むしろ、それが道理であるときえ感じた。川の流れにのって、沈みながら海の方へとそれは連れられていく。水の底の暗いブルーの中に、溶けるように見えなくなっていく。

私は大きな喪失感を覚えながらも、その行為をじっと見届けていた。彼がひとつひとつ丁寧に、名残惜しいように青い塊を海へと流すのを、最後まで目に焼き付けるべきだと自分自身が強く訴えているのを感じたからだ。

「……ありがとう」

彼は泣いていた。こちらに向けたその顔はひどいものだったが、私はそれに構わずに彼の目をみた。彼も、目を逸らすことはなかった。

涙をハンカチで拭った彼は私の方に向き直ると、青いペンキとハケを私の目の前に突き出してきた。

「……これだけは、君にやってみてもらって見たかったんだ」

彼はポリ袋のなかから四つの黒い塊を取り出すと、それを私に手渡してきた。どれも大きな塊ではあったが、私のものよりおおきいものはなかった。私は袖をまくって、彼の見よう見まねで青いペンキを黒い塊に塗りはじめた。

その行為の意味をこどもながらにして理解してしまった私は、彼がなぜこの作業を苦しうにしていたのか、はつきりとわかった。

だからこそ、私はこの作業……いや、使命を果たさなければいけないと強く感じたのだ。

「ありがとうな……。ごめん……。…」

私は彼が感謝の言葉をいうのも、謝罪の言葉をいうのにも納得した。

すべての塊を塗り終わった。長い時間だった気がしたが、空が相も変わらず綺麗なブルーをしていたので、この使命が辛いものなのだと改めて感じたのだった。

「……おじさんは強いね。すごいや」

不意に、そんな言葉がでた。

「そんな……そんな、おじさんは………」

おじさんは、ひどくうろたえてしまった。それがなんだかおかしくって、私は微笑んだ。

そんな過去の夢を見た数日後。祖母の葬儀の日程では、今日は通夜だ。

祖母の死を受けたにも関わらず、私の心にある悲しみはちっぽけなものだった。私は時間を無駄にすまいと、身体をベッドから無理やり起こし、作業的に身体を動かす。皺のついた学生服をさっと着て、すでに車にいる両親のもとへと向かう。

とどころ傷のついたうす汚れたオデッセイは、最後にいつ洗車したかもわからないう。ドアを開けて車の後部座席に座る。父と母はいつもと変わらない調子でおしゃべりしている。重い張り詰めた雰囲気などどこにもなかった。父は私がシートベルトをつけたのだけをミラーで確認すると、口を動かしたままさっさと車を走らせた。母も顔を俯かせることもなく父と話し続けている。窓から見えた空の青だけはなにも変わらずあの日と同じように、向かう先で優しく広がりつづけている。

川に沿って造られた道路を使って祖父母の家に向かう。川の流れに連れ立って進むのは同じなのだが、六年前には少し寂れていた印象を受けた町並みは大分変わっていた。あの古めかしい橋はすっかり町のモダンな景観に合わせられた造りに変わってしまった。

橋の上を通り過ぎるとき、窓の外に空色の作業服を着た男がいたのが目に付いて、私ははっとした。退屈な車のなかで強烈な睡魔に襲われていた私だったが、そんなものはパッとふっとんでしまった。

祖父母の家についていたのは私達が一番早かったらしく、他の親戚はまだ着いていなかった。伯父は相変わらずタバコをふかしていた。ただ顔は特に強張っているわけでもなく、自然体で私たちを迎えてくれた。迎えられた居間は扇風機もクーラーもついていたし、六年前のときのような重い雰囲気もなかった。このまま待っているというのもないわけでもなかった。

けれども、その選択肢はあの橋の下にいる男を見た私にはありえないものだった。母に一言伝えると、私は外へ出た

川沿いに歩いて橋に向かう。橋の下から、見覚えのある姿が見えた。過去の夢と同じ空色の作業服を着た彼は、しかし過去の姿ほどの大柄な印象は受けなかった。すでにこちらに気づいている様子だったので、私は向かう足の回転をはやめる。

あの日と同じように、橋の下の影へと入っていく。

「お久しぶりです」

「ああ、どうも……」

彼は少しバツが悪そうにして、こちらに視線を向けたり外したりしていたが、私の視線が彼の足元の青いポリ袋に向いていることに気がつく。その袋の口を持ち上げて中から私の青い塊を取り出した。それにひどく懐かしさを覚え、私は自然と手を伸ばす。彼は私にそれを渡すか迷ったようだったが、数瞬の葛藤を経た後に私に恐る恐る渡した。

黒の強い深い青の塊。触れていると、塗り潰されて変わったはずのあの感覚が戻ってくる。暗く心を覆ってへばりつくようなそれは、私に辛い感覚を思い出させる。それがたまたまなく嬉しくて、ずっと触れていたかった。

しかし、そうし続けるわけにもいかないことを六年前に知ったのを思い出し、私は青い塊を彼に渡す。

「……いいんだね？」

「……はい」

やはり彼は心苦しい表情をしながら、私のそれを川の中へと転がした。

葬儀は翌日の午前中に終わった。伯父は今回で喪主は二回目であり少しは勝手がわかったようで、たいしたごたつきも無く葬儀を終えることができた。父が走らせるオデッセイは家路へと急ぐ。祖父のときと同じように祖母の亡骸の冷たさに触れ、その死を受け入れさせられたが、六年前のあのときほどの悲しみはやはりなかった。川が流れていく方とは反対の道を行くことに哀愁を感じつつも、私は車の中であの男との不思議な出来事を思いだしていた。

私の青い塊を投げ入れた彼はすでに涙を流していて、わなわなと口を動かして何かいいたげな様子だった。私は彼が思いを言葉にする前に、橋の下の影から出た。

橋の上へと向かう私を追って彼がでてくる。その右手には青いポリ袋が握られていた。橋の上

に二人で横に並ぶ。私は、彼から四つの青い塊を受け取った。それは六年前に私が塗り潰した小さな塊だった。そのうちの二つからは、私の塊に似た不思議な懐かしさを感じた。私はそれをひとつ、またひとつと、川へと投げ込んでいった。川の水面に広がる波紋を見ながら、彼は言った。

「君は強いひとなんだね……」

「そういうわけではありません。それに強いというのならそれはあなたのほうです」

彼はその言葉を聞いて、川の水面に向けていた顔をこちらに向けた。私は川の子き着く先を向いたまま、言葉が続けた。

「昔の頃と変わらずにあんな風に泣けるのは、すばらしいことですけど……辛いことです。おじさんは、それをずっと続けているんですよ」

彼は何だか納得のいかないようだった。私は更に言葉が続ける。

「……おじさんは、誰かの代わりに泣いてくれてるんです。それに、ほら……みてください、あつちを」

川と、青い塊が流れ行き着く先を指差して言った。

「海は……綺麗なまじやないですか」

それを聞いた彼は、なにかから解き放たれたような、今までにない安らかな表情をしていた。

天頂から射す日も相まって、明るい空の青色と深い海の青色はとても眩しく、誇らしくさえ感じた。

きつともう、涙もろいあの男に会うことはないのだろう。快晴の空のように澄んだ心もなければ、あの深い海の悲しさと美しさも忘れていってしまう私にとって、橋で隠されていたあの川の秘密は、もはや塗り潰されてしまったのだった。

それでも、彼が秘密を明かした私という存在は、彼の黒い塊の中に残りつづけていくだろう。彼自身がその塊を塗り潰すのはありえないのを私は確信していた。

オデッセイに揺られながら、急速にリアリティをなくしていく頭の片隅におかれた夏の思い出に怖くなった私だったが、その確信のおかげで怖くはなくなった。

日が傾いて、空が暗くなっていく。川の流れと反対に車が進むのが海と離れていっていることを感じさせる。

……私は、もうすぐ自分がどうなってしまうのかを半ば確信しつつも、不確定なその訪れをいつまでも待っていた。

橋の下にはきつと、よく涙を流すペンキ塗りがいるはずだ。私はその存在をすっかりと忘れてしまうことだろうが、それでも彼はそこで苦い顔をしながら黒いソレを青く塗り潰す使命を続けているだろう。

あの橋はみてくれがどうであれ、彼を含む川の秘密を守るものなのだろう。ねじれの位置にあるかの橋は、川と交わらせないためにあったのだ。

今の彼は、もうひとりではない。少なくとも、過去の私がそばにいたのだから、ずっとひとりだったわけではない。それに、彼には黒い塊という人にもっとも近いものがある。もしかしたら、私の子供や、孫のソレに彼が触れることがあるかもしれない。ココに私がいて、青のペンキ塗りである彼がソコにいる限り。

別れというものは、容赦なく人のつながりを断ち切るものである。死、というものがそのさいたるものかもしれないが、違う土地に引越すのはなかなか諦めがつきにくくたちが悪い。私は平野をとおりすぎた山岳地帯で暮らすことになった。

この土地を離れること自体には、私は特に何も感じなかった。